

市立函館博物館

友の会々報

No.70

令和4年度市立函館博物館友の会見学会 市立函館博物館企画展「平沢屏山とその時代」



令和4年度市立函館博物館友の会の見学会は、令和4年7月8日(金)、市立函館博物館企画展「平沢屏山とその時代」に友の会会員8名が参加し、市立函館博物館学芸員奥野進氏から詳細な解説を得ることができました。以下に、企画展の概要および見学会の様子を紹介します。

1. 平沢屏山という人

平沢屏山は、文政5年(1822)に岩手県花巻市の裕福な名主の長男として生まれますが、父が亡くなると生活に困窮し、弘化年間(1844~48)に20代で、弟を連れて箱館に来ました。この後、安政6年(1859)の箱館開港により国際貿易港となった箱館の街で、屏山は絵師として活躍することが出来ました。そして屏山は、漁場経営を請け負う商人の知遇を得て、日高や十勝地方を訪ねては、アイヌの人たちの生活や労働の姿を多く描くようになり、時にはアイヌの人たちの家に泊まり込み、生活を共にしてその暮らしぶりを描いていたといわれています。

2. 生きいきと描かれた屏山の絵

屏山は、箱館では街の中心地に住み、外国人や商人たちの求めに応じた絵を描いて生計を立てていました。屏山の絵は、ダイナミックな表現で、鮮やかな色彩を使い、細部に至るまでの観察眼は見事です。代表作の一つである『アイヌ風俗12カ月屏風』は、海や山を舞台に、四季折々の自然の恵みの中で生きていくアイヌ人の生活を描いた、見応えのある作品です。説明された奥野学芸員は「アイヌの絵を描いた画家は他にもいますが、表現力では屏山がずば抜けています。使っている道具や習俗についても詳しく正確に描かれており、史料としての価値も見出せます」と高く評価されていました。

3. 和人とアイヌの関係性

アイヌは交易の民です。古い時代から和人と交易を行ってきていました。古い時代には、対等な関係で行われていた交易も、時代と共に「渡党」として蝦夷地に進出する和人が多くなり、争いが絶えなくなりました。アイヌとの戦いに勝利した松前藩はアイヌの人たちを支配的に労働者として搾取するようになりました。『ウィマム図絵馬』の中では、アイヌのリーダーが松前藩主に会いに行く場面が描かれていますが、その背景には、松前藩の大きな家紋が描かれています。この作品は、アイヌと松前藩の関係を明確に表しているといつてよいのではないのでしょうか。



アイヌ風俗1 2カ月屏風（市立函館博物館蔵）函館市指定有形文化財

4. 国際情勢の緊迫化と蝦夷地の幕府直轄化

18世紀後半に入ると、蝦夷地近海にロシアなどの外国船が度々出現するようになり、また蝦夷地では道東部のアイヌたちの蜂起も目立つようになりました。北方沿岸部と海域に危機的な状況が強まり、19世紀初頭、幕府は蝦夷地を直接統治することとしました。

また、道東・道北、千島、樺太に住むアイヌが、ロシア側に付くことを恐れていた幕府は、アイヌから搾取する一方の松前藩のやり方を改善することとしました。「撫育」の名のもとにアイヌ人の待遇改善を図り、無理に農耕を教えたり、日本語の習得をさせるなど、「アイヌ人の和人化」を勧めたのでした。

しかし、それはアイヌの人たちの意思を尊重したものではなく、結局は固有のアイヌ文化や習俗を無視した同化政策でした。奥野学芸員は、屏山のアイヌ絵画からそうした「和人側のスタンスを読むことが出来る」とも解説されていました、

例えば『地引網を引く労働の図絵』がありますが、網を引くアイヌ人のわきで明らかに和人と判る男が見守っています。和人が持ち込んだ地引網漁の方法を教え、安い労働料で働かせ、地引網漁のやり方を教え、漁獲は和人たちがすべて持ち去っていくのでしょうか。

5. 奇人「屏山」の優しいまなざし

屏山は、気分屋で、身なりは構わず、酒好きで野原でも、人の家の屋根の上でも寝込んでしまうという「奇人」だと伝えられているそうです。それでも、絵に向かうと、荘厳で賑やかな「イオマンテの祭り」、大胆な熊祭りの様子、あるいは母子の情愛溢れる場面など、アイヌ社会の文化や生活を描いた作品が沢山あります。

屏山はあくまでも注文主の要望に応じて描いているはずですが、そこにはなぜか、優しいまなざしを感じられます。



会員発表会 「箱館戦争のゆかりの地巡り」 [令和4年9月9日(金) 参加者18名]

「箱館戦争のゆかりの地巡り」は、令和4年度市立函館博物館主催の講座として企画され、本会会長の田原良信が会員発表会を兼ねて講師を担当した。テーマとした「箱館戦争のゆかりの地」は、1869(明治2年)5月11日の新政府軍箱館総攻撃により旧幕府脱走軍が壊滅的な敗北を喫し、新政府軍に制圧された箱館西部地区を対象とした。弁天台場の出入口があった函館市電どつく前入舟児童公園から巡検を開始、船見町・高龍寺へ移動。箱館戦争当時は現在の幸坂下で電車通りに面した所に高龍寺が所在し、高松凌雲が病院長を務める箱館病院分院の役割を担ったが、新政府軍が療養中の会津藩兵士を襲撃し、高龍寺も焼失する惨劇の舞台となった。次に、隣接する船見町・称名寺へ移動。箱館戦争当時の称名寺は、現在の弥生小学校付近に所在し、隣接地には箱館警備の新選組屯所が存在し、土方歳三は陸軍奉行並・箱館市中取締役として新選組を統括していたが、明治2年4月に江差口二股頭の最前線へ転出し、再び称名寺を訪れることはなかった。

この後、市電で十字街電停へ移動。十字街電停付近は、幕末当時には銀座通りから港湾へ繋がる掘割りに架かる異国橋が所在し、箱館の出入口の役割を果たしていた。この異国橋は、土方歳三が弁天台場・箱館救出に向う際に、銃弾を受けて戦死した場所とも伝えられる。この一方、十字街電停から約1km北側の函館市総合福祉センター敷地内にも「土方歳三最期の地碑」という戦死場所が存在する。五稜郭方面から延長する旧松川街道と国道5号線の交点付近に存在した「一本木関門」で土方歳三が戦死を遂げた記録をもとに作成されている。ところが、古くからの箱館戦争関係史料の中では、この2か所の戦死場所についてはほぼ拮抗した状況にあり、異国橋から一本木関門の間は、土方歳三が駆け抜けた最後の地であったことは間違いないと考えられる。



現在の高龍寺(船見町)

[1879(明治12)年 現在地へ移転]



現在の称名寺(船見町)

[1880(明治13)年 現在地へ移転]



異国橋付近

[現在の函館市電十字街電停付近]



土方 歳三



土方歳三最期の地碑

[若松町 函館市総合福祉センター]

市立函館博物館友の会副会長木村裕俊氏 令和4年度「神山茂賞」受賞

令和4年10月、市立函館博物館友の会副会長の木村裕俊氏が、函館文化会が主催し、優れた市井の郷土史研究者や団体に贈呈する「神山茂賞」を受賞されました。「神山茂賞」は、函館出身の郷土史研究家であった神山茂氏の功績を称え、函館市および近郊の郷土史についての優れた研究、発掘、収集、出版などの事蹟を残した個人や団体に贈られるものです。

木村氏は、平成25年に「神山茂奨励賞」を受賞された後にも歴史研究に務め、函館博物館友の会理事および函館碧血会事務局長として各種の活動を行う一方で、長年ライフワークとして取り組まれた箱館戦争研究の総決算となる「箱館戦争新・戦没者名簿」を自費出版されています。

これまでに、箱館戦争当事者の榎本武揚や郷土史家神山茂により作成された「箱館戦争戦没者名簿」を詳細に分析し、新たな名前を補完するなど、現時点でできるだけ正確な名簿となったことが高く評価され、受賞に結びついたと推察されます。誠におめでとうございます。



受賞者挨拶



木村裕俊氏の受賞記念講演

令和4年度の主な事業（報告）

1. 友の会会報の発行

- (1) 友の会会報 第70号（令和5年3月31日発行）

2. 例会・講座等の開催

- (1) 市立函館博物館企画展の見学会
テーマ：「平沢屏山とその時代」
日 時：令和4年7月8日（金）参加者8名
解説者：市立函館博物館 奥野 進 学芸員
- (2) 会員発表会
市立函館博物館開催講座を兼ねて実施
テーマ：「箱館戦争のゆかりの地巡り」
日 時：令和4年9月9日（金）参加者18名
発表者：田原 良信(本会会長)
- (3) 博物館や市民団体との共催事業
まち歩き団体「函館おもてなしガイド」との共催
テーマ：「ゲートシティ函館の変遷」
日 時：令和4年8月16日（火）参加者9名
発表者：根本 直樹(本会副会長)

3. 博物館事業の後援・協力

- (1) 市立函館博物館の開催の企画展等の後援
- (2) 市立函館博物館のワークショップ事業等への共同企画・実践
テーマ：親子で町歩き～西部地区STRY MAP～
日 時：令和4年8月7日（日）参加者親子3組＋北海道教育大学生10名
担 当：根本 直樹(本会副会長)

4. 刊行物の刊行・頒布等

- ・『ガイドブック函館の文化財』・『金子幸正』作品集・函館の絵はがき

5. 総合博物館将来構想等の研究

- (1) 将来構想について、学芸員との対話機会を設けた
- (2) 将来構想への市民の関心の醸成に向けての検討が進展していない

6. 会員数（令和5年3月31日現在） 47会員

一般会員 40名
企業会員 7社